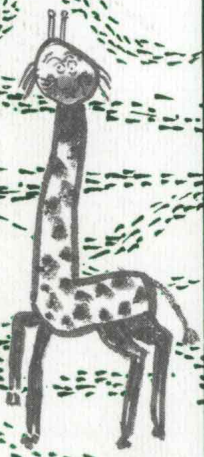
佐藤愛子

冥途のお客

夢か現(うつつ)か、現か夢か



佐藤愛子

冥途のお客

夢か現か、現か夢か

お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「光文社の本」では、どんな本を読まれたでしょうか。また、今後、どんな本をお読みになりたいでしょうか。

どの本にも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽一-一六-六
（〒112-8011）
光文社　学芸図書編集部

冥途（めいど）のお客（きゃく）　夢か現（うつつ）か、現か夢か

2004年9月25日　初版1刷発行
2004年11月10日　　2刷発行

著者　佐藤愛子（さとうあいこ）
発行者　加藤寛一
印刷所　慶昌堂印刷
製本所　ナショナル製本

発行所　東京都文京区音羽1　株式会社光文社
振替　00160-3-115347
電話　編集部　03(5395)8172
販売部　03(5395)8114
業務部　03(5395)8125
メール　g-tosho@kobunsha.com

落丁本・乱丁本は業務部へご連絡くだされば、お取替えいたします。
© Aiko Sato 2004

ISBN4-334-97463-5
Printed in Japan

R本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。

冥途のお客　目次

あの世とこの世 …… 7

怪人の行方 …… 27

どこまでつづく合戦ぞ（1） …… 47

どこまでつづく合戦ぞ（2） …… 67

ノホホンと天国行き …… 85

心やさしい人への訓話 …… 105

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

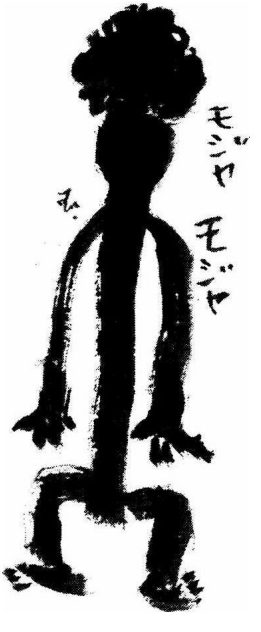
生きるもたいへん　死んでもたいへん　127
珍友　147
地獄は……ある。　169
あの世からのプレゼント　191
狼男は可哀そうか？　213
死は終りではない　231
後書き　251

作画　村上　豊
装丁　前橋隆道

冥途のお客

夢か現(うつつ)か、現か夢か

あの世とこの世



私は冥途(めいど)に沢山の友達がいる。

六十歳の声を聞く頃から少しずつ冥途へ行ってしまう友達が増えてきたが、八十歳間近になった今日この頃は、この世よりもあの世の友達の方が多くなってしまった。

といっても、あの世へ行った友達が始終、訪ねて来るというわけではない。どちらかというと、見知らぬお客、招きたくもないお客、闖入者(ちんにゅうしゃ)といいたいようなお客が一方的にやって来ることが多い。

最初は今は四十を過ぎた娘が十代を終る頃のことだった。ある初夏の日曜日、いつものことながら宵(よい)っぱりの朝寝坊の娘がのっそり起きて来て、洗面所で顔を洗っているのに気がついた私は、娘が洗面所から出て来たら、

「今、何時だと思ってるのッ！」

一喝しようとダイニングテーブルを前に頑張っていた。

すると洗面所から出て来た娘は、私の一喝より早く、こういった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「さっき来てた人、もう帰ったの？」
さっきも今も、朝から誰も来てやしない、あんまり寝過ぎて寝呆けてるのだ、と早速説教に入ろうとしたら、
「でも、ここに坐ってたじゃないの、白いワイシャツ着た人……」
という。洗面所は廊下を挟んで四畳半の茶の間と向き合っていて、その茶の間は私のいるダイニングとつづいている。洗面所側の茶の間の入口には、いつもは半間の襖が嵌っているのだが、夏が近づくと襖の代りにのれんを掛けている。そののれんの間から、茶の間に坐っている男の後姿が娘には見えたという。
「銀行のSさんが来てるんだな、日曜日なのに」
と思いつつ娘は顔を洗い、挨拶をしようとのれんを上げたら誰もいない。確かにいた、そこに坐っていた、と娘はいい張る。私は茶の間つづきのダイニングに坐って朝から新聞を読んでいたのだ。誰も来ていなかったことは確かである。

「でも坐ってたのよ。そこに。白いワイシャツ着て」
と娘はむきになっていい募る。
確かに銀行のSさんだったかと訊くと、向う向いていたから顔はわからない、ただ、何となくSさんだなと思っただけだといった。でも確かに坐ってたのよ、白いワイシャツの男の人が……。
まさか、Sさんが事故か何かで亡くなったんじゃないでしょうね、と手伝いのHさんが横からいった。
「よくいうじゃないですか。人が死ぬ時、親しい人のところへ魂がお別れの挨拶に廻るって……」
しかしSさんはF銀行の得意先係の一人であって、事務的な関係である。死際に挨拶に来られるほどの間柄ではない。
その二日後、Sさんはいつものニコニコ顔で、「お早うございます」と勝手口から入って来たのだった。

ということはつまり、白いワイシャツの男は、あの世から来たお客ということになる。しかし、いくら考えても思い当る人物はいない。

「困るねえ。わけもわからずに来られたんじゃ」

と文句をいいたいにも、どこへ向っていえばいいのかわからないのが、全く困るのだ。

この世では人を訪(おとな)うにはそれなりの目的があるからに決っている。借金取りがやたら来るのは借りた金を返さないという明確な理由がある。招いていないのに深夜に来る奴は、盗みを目的としているからで、来た以上はその目的をわからせるべく行動する。

それがこの世のルールである。意味もなくやって来て居坐る手合がいたとしても、おまわりを呼べば連れて行ってもらえる。そういうルールを弁(わきま)えてこの世で暮していた筈なのに、あの世へ行ってしまうとルール無視になってしまうのは困る、と怒りはするが、しかし、考えてみればその理由、目的を伝えるこ

とが出来ないので冥途のお客の方ももどかしい思いをしているのかもしれない。

人間は「霊体質」という体質の人と、そうでない体質の人に二分されるという。冥途のお客は何かしらそれなりのわけがあってこの世へ来ているのだが、いくらうろうろしていても霊体質でない人にはそれが見えない（感じない）。しかし霊体質の人にはすぐにそれが見えるから、幽霊さわぎが起る。いくら「出た！」「出た！」と騒がれても霊体質でない人には何も見えないから、「あの人はヘンな人よ」、「どうかしてる」、「また始まった」、などとバカにする。霊体質の人としてはいくらバカにされても、実際に「いた」のだから「見えた」のだから、どうしようもないという具合に循環し、「見える派」はだんだん何もいわなくなる。いうならば日蔭者になったような心境になるのだ。

ある心霊研究家の意見では、人間はみなオーラというものを持っていて、俗にあの人はオーラが強いとか弱いとかいうが、オーラとは「霊衣」あるいは

「霊気」と訳してもいいし、「エネルギー」「活力」というふうに考えてもいいという。オーラは普通の人には見えないが、霊能のある人には色が見えるそうだ。通常、ピンクか薄いブルウなど、キラキラ光っていればいるほど心身が健康な印だが、衰弱してくると光を失ってザラザラした砂のようになる。ところが霊体質の人のオーラは紫色がかっているので、霊魂はその色を見て「ああ、この人ならわかってくれる」と思ってやって来るのだという説もある。

私たち親娘はおそらく紫のオーラを持っているのだろう。特に娘の紫色は私よりも濃いにちがいない。私には見えない白ワイシャツの男が見えたのだから。娘と墓参りに行くと、

「ママ、向うのお墓の前に立ってるわね、男が」

という。ぼんやり佇(たたず)む男の後姿を透して向う側の墓石や木立が見えるというのだ。残念だが私には何も見えない。

「見えないの？　へーえ」

娘はバカにしたようにいう。怖がるよりもそれが見えない私に優越感を抱いているらしい。我々はいつか冥途のお客に馴れっこになってしまったのである。

私は娘のように始終お客の姿を見るという方ではないが、見えない代りに色んな目に遭わされる。ゴトン、バチン、ピチッなど、さまざまな物音（いわゆるラップ音といわれる）で眠りを邪魔されたり、物品があるべき場所から移動していたり、突然、テレビがついたり、ついていたテレビが消えたり、それはどうやら冥途のお客の何かしらの挨拶、合図であるらしい。

「番町皿屋敷」のお菊は殿さまの大切にしていた十枚揃いの皿を割ったというので手討ちになり、

「イーチマーイ……ニィマーイ、サンマーイ」

か細い声で皿の数を聞かせることによって、無念の想いを訴えた。

四谷怪談のお岩は、夫の伊右衛門に毒を飲まされ、髪が抜け落ち引っつれ顔になって死んだので、サンバラ髪の引っつれ顔で現れ、怨みの深さを表現し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com